

「日本外交史 その弐」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

1. 遣唐使のはじまりとその後の中断

前回（第 60 回）の「日本外交史 その壱」で詳しく紹介したように、我が国の内政・外交ともに大活躍を見せた聖徳太子（しょうとくたいし）でしたが、622 年に 49 歳でこの世を去ると、彼の後ろ盾となっておられた推古（すいこ）天皇も、628 年に 75 歳で崩御（ほうぎょ）されました。

推古天皇の崩御を受け、後継を誰にするかで朝廷内での意見が分かれていましたが、結局は豪族の蘇我蝦夷（そがのえみし）が推す田村皇子（たむらのみこ）が、舒明（じゅめい）天皇として即位されました。

舒明天皇の時代の大きな出来事といえば、初めて遣唐使（けんとうし）が送られたことが挙げられます。久しぶりに中華大陸の統一を果たした隋（ずい）でしたが、無謀な外征や内政の混乱もあって、建国後わずか 30 年足らずで滅亡しました。そして 618 年に李淵（りえん）が隋にかわって大陸を統一し、唐（とう）を建国しました。

我が国は、隋と同じように唐に対しても文化の交流をはかるべく、630 年に犬上御田鍬（いぬがみのみたすき）らを遣唐使として送りました。ただし、大陸文化の吸収のために朝貢（ちょうこう）はしても、冊封（さくほう）されない国、すなわち「不臣（ふしん）の朝貢国」という立場を維持し続けました。

なお、遣唐使はその後も続けられましたが、大陸や朝鮮半島における情勢の大きな変化に伴い、一時期中断しています。なぜそのような事態となってしまったのでしょうか。

隋が滅んだ後に建国された唐は、朝鮮半島全体を支配下に置くことを考え、手始めに陸続きだった高句麗（こうくり）を攻めました。高句麗は唐の猛攻をはね返しながら、後顧の憂いをなくすため、百済（くだら）と結んで新羅（しらぎ）を攻め立てました。

こうなると困ったのは新羅です。高句麗と百済の両方から攻められたうえに、我が国の支援も得られず、追いつめられた新羅は、起死回生の策として、唐との軍事同盟を選択しましたが、これは、ある意味非常に危険な賭けでした。

新羅が唐と同盟を結べば、間に挟まれた高句麗や百済と戦いやすくなりますが、問題はその後です。高句麗や百済が滅んだ後は、唐と新羅の両国が残されます。ということは、唐は新羅のみを相手に、じっくりと時間をかけて滅ぼすことが可能となるわけです。

その後の展開が読めていた唐は、新羅からの誘いを喜んで受けました。唐から見て、遠く（＝新羅）の相手と結んで、近く（＝高句麗・百済）の敵を倒す、という政策のことを「遠交近攻」といいます。

一方、新羅にしてみれば、将来の不安よりも、「今そこにある危機」の打開のためには、やむを得ない選択でした。そして新羅は、唐の信頼を得るために、常識では考えられない政策を始めるのです。

新羅は自国の滅亡を免れるために、敢えて唐と同盟を結びました。しかし、それは表向き「唐の属国」となることを意味していたのです。新羅は属国であることをアピールするために、自国の文化をかなぐり捨て、唐の真似をすることを始めました。

つまり、民族の風俗や服装、官制や年号だけでなく、名前のあり方（名字を漢字一文字に変えました）に至るまで、すべてをチャイナ風に改めたのです。

百済の有名な将軍である鬼室福信(きしつ・ふくしん)がそうであったように、それまでの新羅を含む朝鮮半島の人々の名字は、我が国の姓(かばね)である「中臣(なかとみ)」「物部(もののべ)」などと同じく「二文字」が基本でした。

しかし、これ以降の新羅では、当時の武烈王(ぶれつおう)が本名を「金春秋(きん・しゅんじゅう)」と名乗るなど、名字を漢字一文字に統一し、これは現代でも「金正恩(キム・ジョンウン)」あるいは「文在寅(ムン・ジェイン)」のように、全く変わっていません。

この後、新羅は唐を追い出して統一国家を創立することに成功しますが、文化的には完全にチャイナに背骨をつくり変えられてしまっており、この点が、公地公民といった律令制をチャイナからほぼ完全な状態で輸入しても、日本文明の基本を一切変えなかった我が国との非常に大きな違いといえるでしょう。

さて、生き残りのために自国の文化をすべてチャイナ風に改めた新羅には、独立国としての面影が全く存在しませんでした。たとえ「唐のコピー」となることがどれだけ屈辱的であろうが、国が滅びては意味がありません。まさになりふりかまわぬ究極の策といえました。

こうして唐と同盟を結んだ新羅は、やがて反撃に転じました。660年には唐と共同で百済を攻め、首都を落とされた百済は滅亡してしまいました。

百済の遺臣たちの多くは、かねてから同盟を結んでいた我が国に逃れ、百済の復興を訴えました。彼らに同意した朝廷は、翌年の661年に斉明(さいめい)天皇ご自身が先頭となって軍勢を率いて、百済救済のために九州へ向けて出発しました。

しかし、斉明天皇は九州から動けぬまま、病のためにその年の夏に68歳で崩御されました。斉明天皇の崩御後は、子である中大兄皇子(なかのおおえのおうじ)が即位しないまま政治を行いました。

これを「称制(しょうせい)」といいます。

我が国と旧百済の軍勢は海を渡り、663年に朝鮮半島の白村江(はくすきのえ、または「はくそんこう」)で唐・新羅の連合軍と激突しましたが、戦いは我が国側の大敗で終わりました。百済の復興は夢と消え、我が国も朝鮮半島への足がかりを完全に失ってしまいました。この戦いを「白村江の戦い」といいます。

白村江の戦いの敗北によって、百済の王族以下多くの人々が我が国に亡命し、その後帰化しました。我が国は唐や新羅の報復を恐れて、国境沿いの対馬(つしま)や壱岐(いき)、筑紫(つくし)に当時の兵士にあたる防人(さきもり)を置いたり、九州北部の行政機関であった大宰府(ださいふ)に大規模な水城(みづき＝大宰府を守るための堀や土塁のこと)を築いたりしました。

なお、水城は今もその多くが残存しており、現地(福岡県太宰府市)に行けば当時の様子が容易に分かります。

さて、朝鮮半島では668年に高句麗が滅ぼされた後、ついに唐と新羅とが国境を接して争う事態となりました。我が国にも緊張感が高まりましたが、結局は唐や新羅が我が国に攻め寄せることはなく、逆に新羅が我が国の後ろ盾を求めて、唐へ朝貢すると同時に、我が国へも朝貢するようになりました。

新羅は旧百済領を唐と争ってこれを奪い、旧高句麗領の南半分とともに自領として朝鮮半島の統一に成功すると、その後は唐に対して謝罪外交と小競り合いを繰り返すなど、唐と交戦状態に入ってから和戦をうまく使い、巧妙な外交を展開しました。

その後、旧高句麗領の北部を中心に渤海(ぼっかい)が建国されたり、唐自体の内乱もあつたりして、兵を集中できなくなった唐は、朝鮮半島の支配をあきらめ、やがては新羅の存在を認めたのでした。

長いあいだ勢力争いが続いた朝鮮半島は、結局は新羅による統一で幕を下ろしました。我が国は任那(みまな)や百済の問題などで、新羅とはかねてより敵対関係にありましたが、状況が変化すると、新羅は手のひらをかえして、我が国に朝貢するなど後ろ盾として頼るようになり、また我が国も新羅を防波堤とすることで、唐の侵略を受けるのを防ぐことができました。

要するに、新羅は自国の生き残りのために唐と同盟を結び、唐と共に我が国と戦って勝利するや、今度は唐を裏切って我が国に朝貢して接近するという、いわゆる「二枚舌外交」を貫き通したのです。新羅によるこうした姿勢こそが、現在の朝鮮半島の情勢を、本当の意味で理解する流れにもつながるといえるのではないのでしょうか。

なお、渤海は唐や新羅と対立することが多く、支援を求めて我が国とは友好的な関係が結ばれ、日本海では交易が活発に行われました。いわゆる「敵の敵は味方」ですね。

島国である我が国は、朝鮮半島に大陸の属国ではない、強力な独立国が存在している間は、大陸か

らの侵略を受けずに済んできたのですが、今回の例も、まさにその原則どおりとなりました。

我が国が原則どおりに行動できた背景の一つに、新羅との友好関係の構築が挙げられます。百済との関係が深かった我が国にとって、それまでの外交姿勢を 180 度転換させるような政策は、そう簡単にできるものではありませんでした。

しかし、実際に 7 世紀後半には遣唐使が行われなかわりに、遣新羅使(けんしらぎし)が短期間に何度も行われているのです。我が国がそこまでの政策転換ができた理由は何だったのでしょうか。

その背景には、白村江の戦いの後の外交路線を、「反新羅」でいくのか、あるいは「親新羅」でいくのかで対立した、「兄弟」による骨肉の争いがあったのです。

この当時、朝廷では中大兄皇子が都を飛鳥(あすか)から近江の大津に遷(うつ)したうえで、668 年正月に天智(てんじ)天皇として即位されましたが、その儀式は決してスムーズに行われたわけではありませんでした。

同じ年に、新羅の僧である道行(どうぎょう)が、三種の神器(=天皇であることを証明する大事な神器のこと)の一つである「草薙(くさなぎ)の剣」を盗むという事件が起きたのです。道行は新羅まで逃げようとしたのですが、途中で嵐にあって失敗に終わりました。

この事件は、新羅が天智天皇のご即位を妨害しようとした事実の一つとされています。天智天皇はかつて百済再興をめざして白村江の戦いを起こされました。ということは、天智天皇が、百済を滅ぼした新羅に対して良い感情をお持ちでないことは明らかだったのです。

当時、天智天皇には後継者として二人の人物がいました。息子である大友皇子(おおとものおうじ)と、弟である大海人皇子(おおあまのおうじ)です。このうち、大友皇子は父同様に「反新羅」の外交路線を継承する考えだったようですが、大海人皇子は「親新羅」路線への転換を考えていました。

我が国とかかわりの深い任那や百済を滅ぼした新羅は確かに憎いですが、その新羅が朝鮮半島を統一しようとする勢いである現状を考えれば、我が国の唐に対する防波堤の意味も込めて、一切のしがらみを捨てて新羅と「大人の関係」を結ぼうというのがその真意でした。

しかし、こうした「現実的」な考えは、「新羅憎し」の感情を優先させる天智天皇や大友皇子には受け入れられず、両者はいつしか対立するようになりました。そして 671 年 10 月、天智天皇は大海人皇子を宮廷内に呼びつけられると、「天皇の地位を譲る」と仰られました。

「これは罠(わな)だ」と直感した大海人皇子はこの誘いを断り、直ちに出家して吉野へ向かい、政治的野心のないことをアピールしました。

天智天皇は、同じ年の 12 月に 46 歳で崩御されました。天皇の崩御は、単なる後継争いのみならず、我が国の今後の外交路線も含めた大きな流れの中で、避けることの出来ない波乱の予感を漂(ただよ)

わせていました。

天智天皇の崩御後は、大友皇子が政治の実権を握られましたが、まだ 24 歳と若い後継者は、父ほどの器量をお持ちでおられず、政情不安が尽きませんでした。様子を見ていた大海人皇子は、672 年 6 月に吉野を出立して美濃へ逃れ、近江朝廷に対して反旗を翻(ひるがえ)しました。

東国の兵士を味方に付けた大海人皇子は、近江や大和へ向かって軍を進めました。近江朝廷側も善戦しましたが、結局は敗北し、大友皇子は自殺しました。大海人皇子が大友皇子を破ったこの戦いを、当時の十干十二支(じっかんじゅうにし)から「壬申(じんしん)の乱」といいます。

乱の後、大海人皇子は都を飛鳥に戻して、飛鳥浄御原宮(あすかきよみはらのみや)で即位され、天武(てんむ)天皇となられると、新羅との国交を回復させ、遣新羅使を何度も派遣される一方で、唐との国交を一時的に断絶されました。

この結果、我が国は新羅という独立国家をはさんで、唐との外交関係修復に時間を費やすことができたのです。なお、遣唐使の復活は 8 世紀当初まで待つことになります。

ところで、我が国の「日本」という国号は、689 年につくられた飛鳥浄御原令(あすかきよみはらりょう)によって正式に定められたと考えられていますが、それから約 1300 年以上を経た現代まで、この国名は全く変わることなく使われ続けています。

チャイナや朝鮮半島などの国々が、王朝が変わるごとに国名が変わってきたことと比較すると、それが特別のことであるのが理解できますね。

我が国の国名が長い年月のあいだ変わっていないのは、チャイナや朝鮮半島などのように王朝が変わって国が途絶えたり、あるいは他の民族にとってかわられたりすることがなかったからです。

「我が国は世界でもっとも長い歴史を持つ国である」。この事実を、現代の日本国民たる私たちがもっと意識すべきではないでしょうか。

2. 鑑真の渡日と刀伊の入寇

630 年に舒明天皇が始められた遣唐使(けんとうし)は、一時期の中断を経て 702 年に復活すると、894 年に菅原道真(すがわらのみちざね)の進言によって廃止されるまで、長く続けられました。

大陸の政治制度や文化を学ぶために、多くの留学生が唐へ渡りましたが、造船や航海技術が未熟であった当時は、遣唐使による航海は命がけであり、中には帰国できずに、そのまま唐で生涯を終えた留学生もいました。

717 年に吉備真備(きびのまきび)らが入唐(にっとう)した際、彼らに同行していた阿倍仲麻呂(あべのなかまろ)は、唐の超難関の試験である科举(かきょ)に合格し、後に唐の高い役職を歴任しました。詩人の李

白(りはく)と親交を持ち、また唐の皇帝の玄宗(げんそう)の厚い信任を得ましたが、才能が高かったゆえに、皇帝がなかなか仲麻呂の帰国を許しませんでした。

やがて、遣唐大使(けんとうたいし)の藤原清河(ふじわらのきよかわ)らの要請によって、753 年によく仲麻呂の帰国が許されましたが、清河らとともに彼を乗せた船が、無情にも暴風雨にあつて難破し、安南(あんなん、今のベトナム)に漂着しました。命からがら長安まで戻った仲麻呂は、その後もついに帰国することなく、770 年に唐で 73 歳の生涯を閉じました。

そんな彼が残した望郷の和歌は、小倉百人一首にも取り上げられ、長く我が国で知られています。

「天(あま)の原 ふりさけみれば 春日なる 三笠(みかさ)の山に いでし月かも」

ところで、阿倍仲麻呂が帰国しようとして失敗に終わった際に、別の船に乗っていたため、無事に我が国にたどりついた唐の高僧がいました。鑑真(がんじん)のことです。

仏教を学ぶ際に重要であった戒律(かいりつ)を日本に広めるために、我が国の留学僧が鑑真を訪問しました。鑑真は弟子たちに「誰か日本に渡る人はいないか」と問いかけましたが、誰も手を挙げようとしないので、「それなら私自身が行く」と自らの渡日(とにち)を決意しました。

しかし、鑑真のような高僧が日本へ渡るということは、大変な苦難を伴いました。弟子たちの密告などによってことごとく失敗し、ようやく船に乗ったと思ったら、嵐にあつて難破してしまいました。5 度にわたる渡日に失敗するうちに、鑑真の両目は失明状態になったと伝えられています。

752 年に遣唐大使の藤原清河らが来唐し、翌年に帰国する際に、鑑真は船に同乗させてくれるよう依頼しましたが、渡日を許さない玄宗皇帝の意を受けた藤原清河は、これを拒否しました。

しかし、副使の大使古麻呂(おおとものこまろ)の機転で、密かに別の船に乗ることができた鑑真は、清河と阿倍仲麻呂を乗せた船が難破した一方で、無事に我が国にたどり着き、ついに悲願の渡日を果たしました。

鑑真は我が国に戒律の他に彫刻や薬草の知識を伝え、唐招提寺(とうしょうだいじ)を創建して我が国に留まり、763 年に 76 歳の生涯を終えました。

ちなみに、彼の死後に造られた彫像(ちょうぞう)は、我が国最初の肖像彫刻(しょうぞうちょうこく)とされています。

余談ですが、大使古麻呂は唐における 753 年の新年の儀式の際に、我が国の席次が新羅(しらぎ)より下になっていることに対して猛烈に抗議し、結果的に席次を入れ替えさせたというエピソードが残っています。

席次の件といい、また鑑真を密かに渡日させたことといい、気骨(きこつ)ある人物でなければ外交官

は務まらないのは、今も昔も同じなのかもしれませんね。

その後、我が国が平安時代に入ると、9 世紀には弘仁(こうにん)・貞観(じょうがん)文化が栄えるなど、唐風の文化に対する貴族の関心は高いものがありました。しかし、唐自体が8 世紀に起きた安史(あんし)の乱の頃から衰えを見せ始めると、多大の出費と航海による危険をおかしてまで、遣唐使を派遣する必要がないと考えられるようになりました。

その背景には、いつまでも大陸からの文明に頼らなくても、独立国として自力の文化を発展させることができるという強い自負もありました。そして先述のとおり、894 年に菅原道真が遣唐使の中止を進言して認められた直後の907 年に、唐がついに滅亡しました。

唐の滅亡後は、五代十国(ごだいじっく)による諸王朝の興亡が続いた後に、960 年に宋(そう)が建国されました。既に独自の文化が発展しつつあり、大陸からの積極的な文化の交流の必要性がなかった我が国は、臣下の礼をとらなければならない朝貢外交を嫌って、宋とは正式な国交を結びませんでした。

我が国では商船が宋へ渡航することも禁じましたが、その一方で北九州に来航した宋の商人が私的な貿易を行ったことにより、書籍や陶磁器(とうじき)などの工芸品や薬品などが輸入されました。また、我が国の僧侶(そうりょ)が新たな教えを求めるために朝廷の許可を得て宋に渡ることも珍しくありませんでした。

なお、この時代の宋は、12 世紀に一旦滅亡した後に再興されましたので、後代(こうだい)と区別するために「北宋(ほくそう)」とも呼ばれています。

先述のとおり、現代の満州(または「中国東北部」)を拠点(きょてん)として我が国にしばしば使節を派遣し、友好的な関係が続いていた渤海(ぼっかい)でしたが、926 年に遼(りょう)によって滅ぼされました。遼は「契丹(きったん)」とも呼ばれ、満州からモンゴル高原東部にまで及ぶ帝国を築きましたが、我が国とは正式な国交を結びませんでした。

また、朝鮮半島では新羅(しらぎ)が9 世紀末に衰えて分裂した後に、10 世紀始めに建国された高麗(こうらい)によって滅ぼされました。高麗は後に朝鮮半島を統一しましたが、我が国は高麗とも正式な国交を結ぼうとはしませんでした。

我が国と隣国との正式な外交関係は、こうして10 世紀のあいだにぶつかりと途切れました。その背景には、後に「国風(こくふう)文化」と呼ばれた我が国独自の文化が発展し、諸外国からの文化の交流を必要としなくなるほどに隆盛を極めたという事実が確かにありました。

しかし、いかに我が国が海で囲まれているからとはいえ、諸外国と正式な国交を結ばなかったうえに、軍隊すら持っていなかったという現実、あまりにも無防備でしかありませんでした。

では、後述する「元寇(げんこう)」のように、この時代に我が国が諸外国の軍勢や海賊などに襲われ

たことはなかったのでしょうか。

実はあったのです。

1019年3月、「刀伊(とい)」と呼ばれ、後に金(きん)を建国した女真族(じょしんぞく)を中心とする海賊の船団が、突如として我が国の対馬(つしま)に来襲しました。海賊はその後も壱岐(いき)から北九州へと移動して、各地で多数の住民を殺害し、あるいは捕虜(ほりょ)としました。

この非常事態に、当時の大宰権帥(ださいごんのそち)であった藤原隆家(ふじわらのたかいえ)は、各地の地方武士を率いて奮戦し、わずか十数日間で刀伊を撃退しました。記録上、我が国の領土に上陸した敵軍を倒した初めての出来事であったこの戦いは、後に「刀伊の入寇(にゅうこう)」と呼ばれています。

さて、海賊による我が国への侵略を撃退した藤原隆家の勇敢な行為は、現代から見ても表彰ものですが、当時の朝廷は、隆家にどんな褒賞(ほうしょう)を与えたと皆さんは思われるのでしょうか。

実は何も与えていないのです。それどころか、彼の行為を叱責(しっせき)すらしているのです。

その理由としては、刀伊の入寇が起こったことの朝廷への報告が遅れて、朝廷が侵略を知ったときには既に女真族が撃退された後だったから、という「手続上の問題」が挙げられていますが、そんな形式的な理由よりも、当時の朝廷による「鉄則」が背景にあったからでした。

では、その「鉄則」とは何でしょうか。カギを握るのは、我が国固有の文化である「和歌」です。

我が国最初の勅撰(ちよくせん、天皇や上皇の命令で歌集などを編纂すること)和歌集である古今(こきん)和歌集の冒頭の序文に「仮名序(かなじょ)」というのがありますが、その一節にこんな文章があります。

「力の一つも入れずに天地の神々を動かし、目に見えないあの世の靈魂(れいこん)を感激させ、男女の仲を良くして、武人の心すら和(なご)やかにすることができるのが和歌なのです」。

要するに、和歌さえ詠(よ)んでいれば、それに潜(ひそ)む超自然的な存在によって、自分たちの思いどおりに世の中を動かすことができる、ということなのです。

当時の朝廷は、和歌によって我が国の「平安」を祈っていれば、その力によって我が国が平和になる、と本気で信じていた傾向がありました。その「鉄則」からすれば、藤原隆家が武力で海賊を撃退したことは「余計なこと」であり、だからこそ当時の朝廷は隆家に恩賞を与えなかったばかりか、彼を叱責(しっせき)したのでした。

朝廷の見解に関しては、皆さんにも様々な意見が存在するとは思いますが、冷静に考えてみれば、現代の私たちも「悪いことが起きませんように」と日々を過ごすことはあっても、万が一のための備えをついつい忘れがちではないでしょうか。

あるいは、日本国憲法の「平和主義」を過信して、9 条をいっさい改正することなく、ひたすら守り続けていれば、我が国がいつまでも平和であり続けると思い込んではいないでしょうか。

何事も起きなければ良いに越したことはありません。しかし、危機管理を普段から施(ほどこ)すとともに、私たちも「万が一」のことを普段からしっかりと意識しておかなければ、いざというときの災害や侵略を防ぐのが難しくなることは明かです。

「刀伊の入寇」は、現代にも通じる我が国にとっての大きな教訓を与えているといえるでしょう。

さて、先述のとおり、我が国は宋と正式な国交を結びませんでしたが、商人とのあいだでは私的な貿易が断続的に行われていました。こうした「日宋貿易」の規模を拡大したのが、我が国史上初の本格的な武家政権を成立させた平清盛(たいらのきよもり)でした。

清盛は摂津(せっつ)の大輪田泊(おおわだのとまり、現在の神戸港の一部)を修築したり、音戸(おんど)の瀬戸(せと、現在の広島県呉市付近)の海峡を開いたりして、瀬戸内海の航路を整備して貿易を拡大しました。

貿易の主な輸出品は金や水銀、硫黄(いおう)などの鉱物や刀剣などの工芸品、あるいは木材などで、主な輸入品は宋銭(そうせん)や陶磁器、香料や薬品、書籍などでした。宋銭は我が国の通貨として流通し、貿易で得た莫大(ばくだい)な利益は、そのまま平氏の貴重な財源となりました。

こうして政治的・経済的に磐石(ばんじゃく)の体制を築いた平氏政権でしたが、やがては源氏によって滅ぼされ、さらには北条氏(ほうじょうし)が幕府の執権(しっけん)となって政治を行った鎌倉時代に、我が国は未曾有(みぞう)の危機を迎えることになるのです。

3. 元寇で見た「鎌倉武士の意地」

我が国は有史以来、他国からの侵略をほとんど受けたことがないという稀有(けう)な国家ですが、悠久の歴史の流れにおいては、20 世紀の大東亜戦争のみならず、それ以前にも存亡の危機を戦い抜いた事実も存在しました。いわゆる「元寇(げんこう)」のことです。

13 世紀の世界は激動の時代でした。モンゴル高原にあらわれたチンギス＝ハーンや彼の後継者によって、アジアから東ヨーロッパにまたがる大帝国が誕生したからです。さらにはチンギス＝ハーンの孫のフビライ＝ハーンによって、中華大陸や朝鮮半島まで支配され、国号を「元」に改めたフビライは、ついに我が国に服属を求めてきました。

しかし、若き権力者であった鎌倉幕府 8 代執権の北条時宗(ほうじょうときむね)が、これらの圧力に一切屈せず、元との 2 度にわたる戦いを制し、神代から続く我が国を守り抜いたのです。

北条時宗がここまで戦う意思をあらわにしたのはなぜでしょうか。また、大帝国たる元軍の日の出の勢いを、なぜ当時の我が国がはね返すことができたのでしょうか。

我が国が周りを海で囲まれているということは、皆さんもよくご存知のとおりですが、こうした「天然の防壁」を持っていた地理的環境が、中華大陸など他の勢力の侵略を受けるという危機から長いあいだ我が国を守ってくれたといえるでしょう。

しかし、その環境には「朝鮮半島に『強力かつ大陸の帝国の言いなりにはならない』独立国家が存在する」という条件がありました。なぜなら、大陸の支配者が朝鮮半島を自己の所有とした場合には、半島を経由して我が国を攻めやすくなってしまうからです。

このため、我が国は昔からチャイナや朝鮮半島との外交関係を非常に重視してきました。例えば、前回（第 60 回）で詳しく紹介したように、聖徳太子(しょうとくたいし)は朝鮮の高句麗(こうくり)や百済(くだら)と同盟を結んだうえで、隋(ずい)と対等外交を結ぶことに成功しました。

また、先述のとおり、白村江(はくすきのえ)の戦いで我が国が唐(とう)と新羅(しらぎ)との連合軍に敗れた後も、唐の反撃を恐れて対岸の警備を強化する一方で、朝鮮半島を統一した新羅と国交を回復させて、唐への牽制(けんせい)としていますし、明治期に我が国が日清・日露戦争を戦ったのも、当時の李氏朝鮮(後の大韓帝国)を清(しん)やロシアの侵略から防ぐことで、我が国の独立を守るためだったのが原因の一つでした。

我が国は、朝鮮半島を緩衝(かんしょう)地帯として巧みに独立を守り抜いてきたのですが、朝鮮が完全に他国の支配下に入ったことで侵略を受け、亡国の危機に立たされるという時期も存在しました。それこそが元寇だったのです。

かつて満州からモンゴル高原東部まで及ぶ帝国を築いた遼(りょう)は、1125 年に女真族(じょしんぞく)が樹立した金(きん)によって滅ぼされました。金はその後も領土を拡大し続け、1127 年には北宋(はくそう)をも滅ぼしました。宋の皇帝の一族は南方へ逃れて南宋(なんそう)を興し、以後は金と南宋という二つの王朝が中華大陸を支配するようになりました。

その後、我が国で鎌倉幕府が成立して間もない 13 世紀始め頃、大陸で金の支配下にあったモンゴル高原にテムジンがあらわれると、モンゴルは「チンギス＝ハーン」と称したテムジンによって統一されました。チンギス＝ハーンはその後も征服を続け、中央アジアから南ロシアに至る広大な地域を領有しました。

チンギス＝ハーンの後継者であるオゴダイ＝ハーンは遠くヨーロッパまで征服するとともに、1234 年には金を滅ぼし、アジアから東ヨーロッパにまたがる大帝國を建設しました。チンギス＝ハーンの孫のフビライ＝ハーンは、チャイナを支配するために都を大都(だいと、現在の北京)に定めて国号を元と改め、朝鮮半島の高麗(こうらい)を服属させました。

要するに、中華大陸に広大な領土を持つ帝国が現れ、かつ朝鮮半島がその支配下に置かれたことによって、周りを海で囲まれた我が国といえども、他国からの侵略にさらされる危険性が高まったのです。

1268 年 1 月、高麗の使者がフビライの国書をもたらし、我が国に対して武力を背景に服属を要求してきました。つまり「日本よ、自分の家来になれ！」と命令したわけです。

当時の我が国を政治的に支配していた鎌倉幕府の対応としては、黙って元の服属国となることを受け入れるか、あるいは元との戦いを覚悟してでも服属を拒否するかを選択を迫られたわけですが、幕府には初めから「元には服属しない」という決断しか有り得ませんでした。なぜそういえるのでしょうか。

鎌倉幕府は、そもそも武力によって他の勢力を自分の支配下に置くことで成立していました。そんな幕府が、いかに強敵だからといって元に服属してその軍門に下ったとすれば、幕府以外の組織や武士団にはどのように映るでしょうか。

「鎌倉幕府は敵に対して尻尾を巻いて逃げた」ということになり、幕府のメンツが丸潰れになるどころか、権威が失墜(しっつい)して以後の支配に悪影響を及ぼすことは間違いありません。さらに付け加えれば、そもそも幕府の「征夷大將軍(せいいたいしょうぐん)」が外国に服属することを選択すれば、その瞬間に將軍の権威は消失してしまうのです(この件は後で詳しく紹介します)。

当時の鎌倉幕府の執権は、同年 3 月に就任したばかりの北条時宗でした。このとき時宗はまだ 18 歳という若さでしたが、幕府の重臣たちと協議を重ねた末、国書に対する返書を黙殺するとともに、元の来襲を予想して、九州の御家人に異国警固番役(いこくけいごばんやく)を課し、沿岸の警備を強化しました。

さて、再三送った使者を追い返されて激怒したフビライは、1274 年 10 月に高麗兵を併せた約 3 万の兵力で、我が国の領土である壱岐・対馬の両島に襲いかかりました。

わずか数百人の人口しかおらず、かつ武装もしていなかった両島の人々は、突然現れた元軍兵や高麗兵になすすべもなく蹂躪(じゅうりん)され、ありとあらゆる暴虐を受ける運命にありました。

しかし、その中で多勢に無勢を百も承知で、敢然と戦いを挑んだ対馬の武将もいました。その名を宗助国(そう・すけくに)といいます。助国は元軍の来襲を知るや、直ちに博多に早船を送り、急報を受けた大宰府は、夜を徹して早馬を鎌倉へと向かわせました。

宗助国ら八十騎の武士たちは、後に続く者を信じて、雲霞(うんか)のような元の大軍に斬り込み、壮絶な玉砕を遂げましたが、元軍を迎え撃った際に、助国の一族郎党全員が顔に笑みを浮かべていたと伝えられています。

助国たちは死に臨んで、なぜ笑みを浮かべていたのでしょうか。実は、同じように笑みを浮かべて国のために尊い生命を散らした人々がいました。大東亜戦争における神風特攻隊の隊員の皆さんです。

特攻隊員の方々のエピソードの一つとして、出撃直前に撮影された写真が知られていますが、十数

名の若き隊員たちは、全員が微笑みを浮かべています。

出撃の約一時間半前に素晴らしい笑顔を写真に留めた彼らは、異口(いく)同音に「いまここで死ぬのが、自分にとって最高の生き方だ」と語っていたそうです。

13 世紀の元寇から 20 世紀の大東亜戦争まで、700 年の時空を超えて共通する、死地に赴(おもむ)く際の微笑みは、いったい何に由来するのでしょうか。それは、日本人の「たとえ我が身は滅んでも、魂は決して死なない」と思う死生観に由来しているものであり、いわば「悠久の大義」に生きたゆえの微笑みなのです。

だからこそ、助国たちや特攻隊員の方々は微笑みをたたえて死地に赴いたとともに、平成 23 (2011) 年 3 月に発生した東日本大震災の際に、一人でも多くの生命を救いたい、ただそれだけのために、危険を顧みずに現地へ向かわれた多くの自衛隊の皆さんの行動に対して、多くの日本人が、心の奥底に眠っていた大和魂の精神を目覚めさせたのです。

さて、助国らの戦死を耳にした北条時宗や多くの鎌倉武士は「打倒元軍」を誓い、一丸となって戦う決意を新たにしました。助国らの気迫は決して無駄にはならず、その後の我が国を大きく動かしたのです。

また、助国や後の鎌倉武士の戦いぶりに対して、元軍の大將キントは「私は色々な国と戦ってきたが、こんなすごい敵と出会ったことはない」と驚き、絶賛に近い評価を下したそうです。なお、宗助国の御霊(みたま)は、長崎県対馬市厳原町(いづはらまち)の小茂田浜神社(こもだはまじんじゃ)に現在も祀(まつ)られています。

壱岐・対馬を攻め落とした後に博多湾に集結した元軍の船団でしたが、その際に両島の人々を男女とも素っ裸にしたうえで、男は手に穴を開けて船縁(ふなべり)に吊るし、女は髪の毛で吊るしてあったという記録が日本側に残されています。およそ人間のすることとは思えません。

元軍の信じられないような仕打ちに対し、怒りに震えた我が国は、九州地方の御家人を中心に彼らと応戦しましたが、それまでの一騎討ちを中心とし、名乗りをあげてから攻め込む日本式の戦闘方法が元軍の集団戦法には通用せず、いきなり大量の矢を浴びてしまいました。

この他にも、いわゆる「てつはう」と呼ばれた爆発物に馬も武士も大いに戸惑うなど、元軍流の戦闘に不慣れな幕府軍は苦戦を強いられましたが、亡国の危機に際して、懸命に戦い続けた幕府軍の武力は決して元軍に引けを取らず、逆に彼らを追いつめることになるのです。

それまで圧倒的な武力で他国を屈服させ続けてきた元軍でしたが、幕府軍による彼らがこれまでに受けたことがないような激しい抵抗は、元軍に大きな被害をもたらすとともに、彼らを恐怖に陥(おとし)れました。

やがて元軍は沖合に船を避難させると、何とそのまま高麗まで退却してしまったのです。この戦い

は、当時の年号から「文永(ぶんえい)の役」と呼ばれています。

なお、これまでの通説では、季節外れの暴風が吹き荒れたことで元軍が退却したとされてきましたが、実際には、意外な抵抗を受けて怖くなった元軍や高麗軍が逃げ帰ったというのが真相であり、日本側の記録にも「朝になったら敵船も敵兵もきれいさっぱり見あたらなくなったので驚いた」と残されています。

こうして文永の役を乗り切った我が国でしたが、フビライがこの一戦だけで侵略をあきらめるとは到底考えられません。今度は前回の何倍もの兵力をもって我が国に再び襲いかかるであろうことは誰の目にも明白であり、そのことが若き執権の北条時宗を悩ませました。

来日していた南宋の名僧の蘭溪道隆(らんけいどうりゅう)らと相談した時宗は、やがて元軍と徹底的に戦う意思を固めましたが、この決断が最終的に我が国を救うことにつながるのです。

4. 神風をもたらした「断固たる決意」

文永の役が起きた翌年の1275年、フビライは様子を見るために我が国に再び使者を送りましたが、幕府は使者の首をはねて外交拒絶の意思を明らかにしました。これは、以前に元が送った使者が我が国に長期間滞在したことで、スパイ活動をしていたのではないかと疑われたからでもあります。

元との再戦を決意した北条時宗は、異国警固番役を強化するとともに、全国の御家人に命じて博多湾沿いに石造の防塁である石塁を築き、元の再来襲に備えましたが、その際に時宗は、工事への参加に関して一切の妥協も反論も許さなかったそうです。

元軍の来襲という未曾有(みぞう)の国難に備えたわけですし、また武家政権の棟梁(とうりょう)としても当然の行動といえるかもしれませんが、このように政治や軍事において「断固たる決意を示す」ことが、後々に大きな影響を与えることは、今も昔も変わりません。

我が国の強硬な姿勢に対して、再び日本を攻める決断をしたフビライは、1279年に南宋を滅ぼすと、返す刀で1281年の5月から6月にかけて、兵数約14万人という前回の4倍以上の兵を、二手に分けて再び博多湾に差し向けました。

軍船約4,000隻(せき)の大船軍団が博多湾を覆(おお)い尽くすかのように来襲し、それこそ黒雲のような矢の雨を降らせてきましたが、防備力の高い石塁が存在していたことや、文永の役を経て相手の戦法を理解していた幕府軍が冷静に戦ったこともあって、元軍はなかなか上陸ができませんでした。

それでも、元軍の一部が幕府軍の守備の及ばない搦(から)め手から上陸し、博多の町に侵入して乱暴狼藉(らんぼうろうぜき)を働きましたが、すぐに幕府軍に見つかって、街中で激しい戦いを繰り広げました。

一方の幕府軍も、夜になって周囲が真っ暗になると、夜陰にまぎれて敵船に乗りこんで火をつけ、あわてた敵兵を討ち取るといったゲリラ戦を敢行するなど健闘を重ね、戦いは膠着(こうちやく)状態となりました。

そして7月1日(現在の暦で8月16日)、北九州方面を襲った大暴風雨によって、元軍の乗っていた軍船がことごとく破壊され、多くの兵が亡くなりました。戦意を喪失した元軍は高麗へと引き上げ、国内に残った兵も幕府軍の掃討戦によって討ち取られました。元軍との二度目のこの戦いは、当時の年号から「弘安(こうあん)の役」といい、文永の役とともに元寇と呼ばれています。

さて、外国による本格的な来襲という有史以来最大の危機を乗り越えた我が国でしたが、その背景に勇敢に戦った鎌倉武士の大きな功績があったのはまぎれもない事実です。元寇の時期がたまたま武家政権の鎌倉幕府の支配であったことも幸いしましたが、我が国の勝利には、それ以外にも様々な理由がありました。

まず元軍といっても、その大半が征服した異民族の連合軍であり、各人の戦意が乏(とぼ)しいのみならず、意志の疎通が十分に行われなかったという一面がありました。また、突貫工事で高麗に造らせた船は決して丈夫ではなく、しばしば転覆(てんぷく)の憂き目にあったほか、弘安の役の際の大暴風雨で、多くの軍船が破壊されるとともに、数えきれないほどの兵の生命を奪ったとされています。

また、大陸を縦横無尽に駆け回る陸戦と違って、元軍にとっては不慣れな海戦であったことや、我が国の風土に合わない兵士が次々と疫病(えきびょう)で倒れるという不利もありました。

さらに何よりも元軍を悩ませたのは、それまでに他国を征服した際に大いに利用してきた騎馬軍団が、元寇の際には全くといっていいほど使えなかったことでした。

騎馬軍団を構成する馬は非常に神経質な動物であり、海を渡って攻め寄せる際に、船に乗せることが大変難しかったことで、元軍は得意の騎馬をほとんど使わずに我が国と戦わなければならない、という大きな不利を当初から抱えていたのです。

一方、元の来襲という国難に際して、特に弘安の役の際に暴風雨が発生したことで「我が国は神風に守られている」とする神国思想がこの後に主流となっていきました。この思想は、やがて我が国に対して大きな影響をもたらすことになります。

さて、あきらめきれないフビライは、我が国に対して三度目の来襲を計画しましたが、諸般の事情で中止となり、元はその後二度と我が国を攻めることができず、やがて内乱に次ぐ内乱が起こって、1368年に明(みん)によって滅ぼされました。

また、元とともに戦った高麗も、1392年に李成桂(りせいけい)によって倒されて李氏朝鮮が成立するなど、我が国に手を出した国家がやがて必ず滅びるという結果となってしまったのは、果たして偶然の出来事なのでしょうか。

以上のように、元寇を通じて様々な動きやその背景、あるいは側面が見られましたが、間違いなく断言できることは、北条時宗による「元軍を討つ」という「断固たる決意」があったればこそ、我が国は二度にわたる元寇をはね返すことができたということです。

もし元からの服属の勧告に従っていれば、いずれは元やその後のチャイナの影響力が我が国の奥深くにまで及んでいたことでしょう。そうなれば、もちろん今のような我が国の平和や繁栄など有り得ない話です。

昔からの名言に「天は自ら助くる者を助く」とありますが、圧倒的な軍事力を誇る大帝国の元に対し、祖国を護る意思を明確にした北条時宗の決断そのものが、我が国にとっての「神風」となり、同じく我が国を護るために立ち上がった鎌倉武士団が断固たる戦いを繰り広げたことによって、その「神風」が激しく吹き荒れたといえるでしょう。

時宗による「我が国は世界に冠たる独立国である」という断固たる意思是、かつて遣隋使を送った聖徳太子以来の「国是」であると同時に、我が国固有の領土である尖閣(せんかく)諸島をしきりにうかがっている現代の「元寇」にもつながる大きな教訓ではないでしょうか。

5. 征夷大將軍の重責と「元寇抹殺計画」

元軍の二度にわたる来襲に立ち向かい、これをはね返した北条時宗でしたが、超大国の元と長年互角に渡り合った彼のストレスは尋常ではなく、やがて重い病に倒れました。

病状は回復することなく、弘安の役からわずか3年後の1284年4月に、時宗は34歳の若さで亡くなりました。まさに元寇に明け暮れた彼の生涯であったともいえますが、我が国の命運を一身に託され、見事にその役割を果たした時宗の偉大さは、時を越えて永遠に称えるべきものであるといえるでしょう。

さて、時宗亡き後の鎌倉幕府ですが、相手が外国だったために御家人たちに与えるべき恩賞がなかったことなどもあって信頼を失い、元寇から約半世紀後の1333年に滅びましたが、一時期を除いて武家政権はその後も長く続きました。それはなぜでしょうか。

カギを握るのは、幕府の象徴であった「征夷大將軍」の地位です。

そもそもは東北地方の蝦夷(えみし)を倒すために朝廷から選ばれた臨時の役職であった征夷大將軍でしたが、戦時における徴税権や徴兵権を委任されていたことから(そうでなければ戦えません)、やがては朝廷から独立した軍事政権のトップとして、1192年に源頼朝(みなもと の よりとも)が任じられ、鎌倉幕府が誕生しました。

その後、執権の北条氏が力をつけて源氏が滅び、征夷大將軍は名目だけの地位として摂関家や皇族が就任するようになりましたが、元寇という有史以来最大の外敵、すなわち「夷狄(いてき)」を「征伐」する「將軍」としての重責を鎌倉幕府全体で果たしたことが、我が国において武家政権が高い

評価を得ることにつながりました。

だからこそ、鎌倉幕府が減んだ後に後醍醐(ごだいご)天皇によって「建武の新政」が一時は行われても、数年後に足利尊氏(あしかがたかうじ)が新たに征夷大將軍に任じられて室町幕府が開かれるなど、武家政権は頼朝以来 700 年近くにわたって続いたのです。

そして、19 世紀後半に開国などによる混乱が続いた際に、江戸幕府が征夷大將軍として、つまり外国に対して武力以外も含めた「攘夷(じょうい)を行う意思」を明確に示せなかったことが、結果として武家政権全体の信頼を失い、明治新政府の誕生につながったともいえます。

すなわち、我が国にとって「征夷大將軍」とは単なる名誉職ではなく、国家の命運を預かる重要な地位であるがゆえに、その職責を果たせない將軍は、やがてその地位を失うのみならず、我が国が存亡の危機を招きかねないという大きな流れが国全体を包んでいるといえますが、これは現代においても決して例外ではありません。

先述した「天は自ら助くる者を助く」という精神が証明しているように、今後の世界情勢を注視するとともに、気が付けば「間近に迫った亡国の危機」とならないためにも、我が国における「平成の征夷大將軍」の覚悟が今こそ問われているのではないのでしょうか。

これまで述べてきたように、元寇は我が国の歴史を語るにおいて絶対に欠かすことのできない重要な事項であり、歴史教育においてその流れをしっかりと教え、後世に伝えていくことは必須であるといえます。

にもかかわらず、前回(第 60 回)の「聖徳太子」と同様に、文部科学省が新学習指導要領において、「元寇」を「抹殺しようとした」事実を皆さんはご存知でしょうか。

平成 29 (2017) 年 2 月に文科省が小中学校の次期学習指導要領の改定案を公表した際に、中学社会の歴史的分野において「聖徳太子」が「厩戸王(うまやどのおう)」との併記にすると書かれていたのは前回述べたとおりですが、実は「元寇」も「モンゴルの襲来(元寇)」と変更すると表記されていたのです。

文科省は呼称(こしょう)変更の理由を「歴史学の世界では『モンゴルの襲来』と表現するが通例だから」と説明しましたが、この件に関して、参議院の山田宏(やまだひろし)議員(自民党)は、前回の「聖徳太子抹殺計画」と同様に、SNS などを通じて以下のように警鐘を鳴らされました。

「『寇』が『敵による侵攻＝侵略』の意味であるのに対して、『襲来』は『襲いかかってくる』と意味で、国による計画的な侵略の意味はない。しかし、元寇は元軍による明らかな『侵略戦争』であり、『イナゴの襲来』などとは別次元のものである」。

「元寇という、『神風』とともにある日本人の数百年にもわたる歴史的記憶を、戦後の歴史学者たちが消し去ろうとしている。『元寇』の改悪阻止のため、『聖徳太子』の存続と共に、是非心ある

皆さんの声を文科省に届けてください。私も全力で頑張ります」。

山田先生をはじめとする関係者の皆さんのご尽力や、パブリックコメント（意見公募）の結果などを受けて、平成 29（2017）年 3 月 31 日に公示された新学習指導要領においては「元寇（モンゴル帝国の襲来）」という表記となり、「元寇抹殺計画」は何とか回避されました。

しかし、我が国の歴史教育を取り巻く様々な環境を考慮すれば、いずれ再び「歴史的表現の抹殺」が断行される危険性が否定できないのではないのでしょうか。前回に紹介した山田宏先生のお言葉を再掲して、今回の結びとさせていただきます。

「これで次の改訂まで 10 年間は大丈夫だが、文科省の学習指導要領改訂のプロセスの問題点も分かった。学習指導要領改訂原案は、文科省の国立教育政策研究所の各教科調査官（教師出身）1 名と、文科省の視学官（調査官出身）1 名でまとめられる」。

「これでは担当官の恣意(しい)が入り込みやすい。特に、国民精神の支柱と深く関わる歴史、地理、国語、公民などの分野は、しっかりと定見をもつ人物を担当につける仕組みや、助言グループの設置など、次の改訂まで検討しておかないと危ない」。（続く）

主要参考文献：「日本の歴史 1 古代篇」（著者：渡部昇一 出版：ワック）
「逆説の日本史 2 古代怨霊編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）
「逆説の日本史 3 古代言霊編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）
「逆説の日本史 4 中世鳴動編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）
「逆説の日本史 6 中世神風編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）
「国家の再興」（著者：西村眞悟 出版：展転社）
「新版 新しい歴史教科書 中学社会」（出版：自由社）
「詳説日本史 B」（出版：山川出版社）
「日本人の誇りを伝える最新日本史」（出版：明成社）
「年代ごとに読める歴史事典 最新日本史教授資料」（出版：明成社）

YouTube 再生リスト「日本外交史 その弐」

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML6w3cwv9Omra3b3wf057kxj>

黒田裕樹の歴史講座

<http://rocky96.blog10.fc2.com/>